

32 カイゼン手法を用いたスキル向上の取り組み

済生会栗橋病院

○栗田 幸喜 宝田 順

1. 目的及び方法

昨今、医療を取り巻く環境が厳しくなる中、業務の改善・改革が行われているが、ある課題の改善を進めるうえで幾つかの手法があり夫々応用され使用されている。今回、製造業を中心に組み利用されてきたシックスシグマのDMAICと呼ばれる五つの改善ステップ手法を支援ツールとして使い、放射線技術科の体制・体質の改善を目標に、教育および個々の質向上を図り全体のレベル向上を目指す取り組みを行ったので報告する



2. D (Define Phase) 定義

平成 23 年度に開設された地域救急センターは、当院の救急医療に対するビジョンを地域に示すものであり、病院経営を大きく左右する事業でもある。放射線科においても迅速かつ正確、円滑に業務を遂行するための体制を整備しておくことは当然のことである。そこで今回、放射線技術科全体のレベル向上を目指すこととした。

3. M (Measure Phase) 測定

当院の検査の実情を把握するため、過去 2 年間における件数の動向ならびに、当直帯における緊急検査の内訳を調べた。

4. A (Analyze Phase) 分析

救急医療の受け入れにおいて、質の高い医療を提供することを前提に、放射線科に求められる要

因を検討した。緊急検査として CT 検査・MRI 検査・血管撮影の重要性が高く、中でも CT 検査への依存が強く内容も多岐にわたってきている傾向がある。教育およびスキルアップが必要である。

5. I (Improve Phase) 改善

要因を 4 ブロック図で優先順位を付けていき、絞られた要因に改善の為の解決案の立案をし、改善項目を明確にすることとした。その中で件数も増加傾向にある CT 業務の必要性は高く、高度な技術・知識が診療放射線技師に求められ個々の質向上（レベルの向上）を図ることが最優先課題と考えられた。そこで個別での CT 業務レベルを測定し教育計画をたて実施するとともに、年度末には目標値に達することを目指し日常業務を遂行することとした。

6. C (Control Phase) 管理

各個人の目標値が達成されたのは 6 名であり、全体の平均レベルも 58 点から 62 点に上昇した。これは初期評価面接時に目標値を少し高めに設定したことも原因と考えられるが、個々のバラツキはあるものの初期評価より最終評価が全員高くなっており、レベル向上は図られたものと思われる。また現在の救急医療における現場においては、高得点よりも全員が各項目 3 点以上の平均スキルを取得できるよう考慮していくことも重要と感じられた。

今後も継続的に業務評価レベル表を用い評価していく事とした。

7. 結論

DMAIC 法を用い、最優先課題を CT 業務のレベル向上とし 1 年間取り組んだ。この手法は結果そのものよりも、その結果を生み出すプロセスの変革を行う事に主眼をおいているといわれており、今後も DMAIC 法を応用し改善に取り組んでいきたい。